

# 文学活動初期における周作人の女性観

—— 翻訳小説『侠女奴』を中心に

李 瑾

## 1. 周作人の経歴と本論の意義

周作人(1885 - 1968)<sup>1</sup>は中国近代文学の祖と言われている魯迅の実弟である。中国浙江省紹興府会稽県東昌坊新台門の没落したある封建士大夫の家庭に生まれた。16歳までは兄の魯迅(1881 - 1936)と同様に中国の伝統学問を学んだが、17歳の時南京の江南水師学堂に入り、西洋の学問等を学んだ。1906年夏、魯迅の後を追ひ、日本に留学した。1908年、立教大学に入学後、彼は古代ギリシア語と英文学を修めた。その間、許寿章、銭玄同(1886 - 1943)等と共に、章太炎に国語を学びながら文学活動を続けた。1911年に帰国し、浙江省軍政府教育司課長、紹興教育会会長、浙江省第五中学校教員、『紹興教育会月刊』の主編等の職を経て、1917年3月、魯迅の紹介で北京大学の国史編纂部に入り、9月北京大学文科の教授に採用された。

北京大学に赴任した周作人は早速新文化運動<sup>2</sup>に身を投じ、1918年末から1919年の初めにかけて、「人間の文学」<sup>3</sup>、「平民の文学」<sup>4</sup>、「思想革命」<sup>5</sup>等の文章を発表した。彼はそれらの文章の中で、人間らしい文学、平民のための文学を提唱し、非人道的及び貴族のためだけの文学を排斥すべきだと指摘し、更に「文学革命において、文字の改革は第一歩である。思想改革は第二歩であるが、第一歩より極めて重要である。」<sup>6</sup>と主張した。これらの観点、主張は新文化運動の理論的な基礎となり、広範な影響を及ぼし、新文学の創建に大きな役割を果たした。一時彼の文名は兄の魯迅を凌ぐほどであった。

このような周作人が生涯にわたり、関心を寄せ続けた問題の一つが女性問題であった。1904年周作人は「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」<sup>7</sup>という文章を雑誌『女子世界』<sup>8</sup>第5期に発表し、文壇に名を上げた。駆け出しの文筆家とはいえ、彼は自由を失った中国女性の悲惨な生活を鋭く描き、女性を男性の付属品、玩具、そして封建家庭を維持するための生殖の道具としかみなさない、不合理かつ残酷な封建制度を暴き出し、女性への同情を示しながら、貴重な歳月を無駄に費やさないうためにも、人間らしく生きていくためにも、自ら闘わなければならない、と女性自身の自覚を呼びかけた。

1918年末、周作人は日本の女流歌人と謝野晶子の評論「貞操論」<sup>9</sup>を翻訳し、雑誌『新青年』に発表した。中国では古くから女性に厳しく貞操を課していた。1914年3月袁世凱政府は婦女の節烈貞操をもって世の模範とするに足る者を表彰の対象の一つとし、道徳的に優れている者を表彰するために「褒揚条例」<sup>10</sup>なるものを公布した。この項目は袁世凱政府が潰えた後も、1917年末中華民国が公布した「修正褒揚条例」によって生き延びていた。当時の

中国では、女性の貞操問題はタブーであり、最も進歩的、先駆的であったはずの『新青年』ですら、それまでこの問題を取り上げたことはなかった。「貞操論」の翻訳発表によって、貞操問題に対す<sup>11</sup>る知識人の関心を高めることとなり、胡適(1889 - 1962)の「貞操問題」<sup>12</sup>、魯迅の「私の節烈観」<sup>13</sup>を初めとする、女性問題に関する議論が本格的に始まった。折からの知識人による女性解放問題に対する検討が更に真剣に取り組まれるようになった。周作人は、それまで誰も敢えて触れようとしなかった中国女性の貞節問題に注意を喚起し、それによって本格的に女性解放の議論の幕が上げられた。

「貞操論」の翻訳文を発表してから、彼自身もヒューマニズム的な観点から、文化人類学、性心理学、道徳史等の豊富な知識を通じて、封建制度を鋭く、厳しく批判し、女性の新たな生き方を提唱し、女性解放運動の先頭に立った。そして、彼はついに女性は男性と同等な人間であるが、男性とはまた別の人間である<sup>14</sup>という現代においても先駆的な発言をし、女性問題の本質にまで辿り着いた。また、五四新文化運動の退潮期、自由結婚同様、自由離婚をも尊重するという考えの下で急増する自由離婚現象に対し、多くの自由離婚支持者がいたにもかかわらず、彼は現代中国青年が婚姻観念に対する墮落がうかがえると自由離婚を批判した<sup>15</sup>。周作人は未熟で不安定な社会制度の中で女性の立場を守ろうとした。その冷静さ、鋭さと責任感には目が奪われる。

60年間あまりの文学活動によって、周作人は膨大な文学作品を残したが、一生涯意欲的に取り組み続けたのはやはり女性問題であった。現在の研究では、周作人が女性問題に対する関心を持ち始めたのは「人間の文学」を発表してからとされるのが一般である。つまり、「五四時期の周作人は、与謝野晶子のように母性保護にも反対し、女子の徹底した経済的独立を主張するといったことはなく、女性を人間として、人類の一員として捉えようとする以外に、特に具体的な婦人解放論を提出すると言うようなこともない。婦人解放という問題は、当時の彼の議論の中核をなす人道主義および人類主義の中に包括されるものだったとも言える」<sup>16</sup>とされている。「人間の文学」は周作人の中国現代思想、文化史と現代文学史における歴史的地位を固めた。<sup>17</sup>ことは確かであるが、それは女性問題に関心を持つ始まりではない。周作人は五四新文化運動の前期において、「貞操論」を翻訳発表するまでに、女性問題に関する発言をしていないことは事実である。しかし、彼が文学活動の初期から意欲的に女性問題を取り扱った事実を見逃すことはできない。

本論では、周作人が文学の舞台に登場する時期に発表した翻訳小説『侠女奴（アリ・パパと四十人の盗賊の物語）』を中心として、「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」を手がかりに、彼の文学活動初期における女性問題に関する主張、見解、観点等を詳細に分析する。それによって、周作人が人道主義、人類主義を取り込む中で女性問題に興味を持ったのではなく、むしろ女性問題を解決するために人道主義、人類主義を積極的に取り込んだことを明らかにしていきたい。

## 2. 『侠女奴』<sup>18</sup>の翻訳から見た周作人女性観

郭延礼氏<sup>19</sup>は「周作人の思想には封建礼教の影響が見られる」<sup>20</sup>と述べている。その論拠

は、1904年雑誌『女子世界』の第八、九、十一、十二巻に連載した周作人の翻訳小説『侠女奴（アリ・ババと四十人の盗賊の物語）』である。この小説の中でアリ・ババは、偶然盗賊が財宝を隠している洞穴を発見し、多くの金貨を手に入れる。その事を兄のカシムに感づかれるが、貪婪なカシムはアリ・ババの口から洞穴の門を開ける呪文を聞き出し、さっそく財宝を取りに洞穴に入る。しかし、帰ってきた盗賊にカシムは体をばらばらにされ殺されてしまう。カシムの死を告げられた彼の妻は、悲鳴をあげながら泣いてしまう。そんな時アリ・ババは義理の姉に「あなたを二番目の妻とする」と結婚を申し出る。そのセリフを周作人は次の様に訳している。

（アリ・ババは）何度も同居の便利さを挙げ、同居を申し出ながら、別居してはいけないとした。その理由とは、同居すれば、困難に遭遇した時助け合えるだけではなく、（カシム）を亡くした悲しみも互いに慰め合えるというものである。カシムの妻は思い悩んでいた。カシムはもう亡くなっているが、この富を絶対に外には漏らしてはいけないこと、それから、今アリ・ババの家は最も隆盛を誇っており、このような移る場所ができれば、貧困な生活を送ることもないであろうことを。そして彼女はよく考えた挙句、彼の案に従うのが聡明な考えではないかと思った。それで、（彼女は）躊躇せず、すぐ返事をしたのである<sup>21</sup>。

上の訳文の通り、周作人はアリ・ババが義理の姉を妻にしたという事実を隠し、同居を申し出たと書き換えたのである。

確かに当時の中国では、女性に対して極めて厳しい貞節を課し、例えば夫に死なれても、女性の再婚は決して簡単に許されることではなかった。まして自分の義理の弟に嫁ぐなどというのは、封建社会の下ではありえないことであった。寡婦の再婚について、夫馬進氏は「寡婦に守節を求め再婚を嫌う風潮は宋の時代に始まるが、こうした風潮が社会全体に浸透し、社会道徳として広く作用するようになったのはむしろ明清時代に入ってからである」<sup>22</sup>と指摘し、寡婦に対する守節を求め再婚を拒んだ主な精神的要因は、「明清以降の礼教による貞節観念の強化である」と述べている。周作人がこの物語を翻訳したのは、清の末期であった。夫馬氏の言によると、「烈女節婦を奨励するキャンペーンの真っ只中であり、寡婦に守節を要求し再婚を嫌う風潮の最も強くなった時期」である。周作人は女性が男性のために貞節を守るべきであり、再婚するべきではない等の封建礼教の思想を受けたため、その事実を書き変えたと郭延礼氏は理解し、「周作人の思想に封建礼教の影響が見られる」と断定したと思われる。

しかし、アリ・ババが未亡人の義理の姉を妻とした事実を周作人が曖昧にしたという事実は、本当に郭延礼氏の理解通りであろうか。アリ・ババが未亡人に結婚を申し込んだ時のセリフを見てみよう。

アッラーは寛仁にましまして、私に必要以上にたくさんの富を下さいました。だから、あなたの身に及んだこのどうにもならない不幸に際して、もし何ごとかまだあなたを

慰めることのできる事があるとすれば、私は、アッラーの送ったもうた私の財産と、あなたの持っている財産とを一つに合わせ、あなたをば今後二番目の妻として、我が家に入れてもよいと、申し出ましょう。こうしてあなたは、私の子供達の母親には、優しく、よく気をつく妹を見つけるでしょう。そして私たちは一緒に、故人の徳を語りながら、皆で安らかに暮らすようになるでしょう<sup>23</sup>。

アリ・ババはこうして未亡人を二番目の妻にした。彼のこの行為は寛仁な神様の如く、哀れな未亡人（女性）に暖かい助けの手を差し伸べ、彼女を慰め、そして幸せまで与えてやろうという親切な立派な行為に見える。また、未亡人（女性）も彼に守られ、安らかに暮らせるという幸運な運命を得たようにも見えるが、実はそうではない。救世主の言葉であるかのように聴こえるこのアリ・ババのセリフの裏に、女性の悲惨な生活と残忍な社会制度が隠されているのである。

アリ・ババが結婚を申し込んだ理由は勿論愛のためではなく、同情のためでもなかった。その理由はカシムの妻の鋭い叫び声と秘密の漏洩を防ぐためであった。簡単に言えば、アリ・ババが自分の命を守るためであり、思いがけず得た財宝を手放したくなかったからである。それがなければ、アリ・ババが未亡人に求婚する事はなかったと思われる。

一方、亭主（カシム）に死なれ、突然の不幸が訪れた未亡人はアリ・ババの二番目の妻、つまり妾になれば、幸せになれるのであろうか。答えはアリ・ババのセリフにはっきりと表れている。“あなたをば今後二番目の妻（妾）として、我が家に入れてもよいと、申し出ましょう。こうしてあなたは、私の子供達の母親（正妻には）には、優しく（従い）、よく気をつく（気を遣っていれば）妹を見つけるでしょう。そして私たちは一緒に、故人の徳を語りながら、皆で安らかに暮らすようになるでしょう。”と。

当時の中国において、封建家庭で最も身分が卑賤なのは妾と言えよう。妾は家族の一員と認められず、自由もなければ権利もない上、その家族全員に服従しなければならない。家族の一員と認めていないため、妾の生んだ子供は主人の子であり、封建家庭の子孫ではあるが、妾の子ではない。ゆえに、その子供は正妻の子として養育されることになり、生みの母親（妾）を母と呼べず、父親の正妻を母と呼ぶなければならない。又、その子供に対し、生みの母親（妾）は「若奥様」や「若旦那様」として扱い、失礼のないように接しなければならない。又、もし主人に死なれたら、妾たちを追い出すか自殺させるか売りに出すかは全て正妻の勝手である。つまり、封建家庭の秩序の一つとして、妾は男性が性的快楽を求める対象としか認められていないのである。蓄妾制の実態について、白水紀子氏は「疑いもなく、男性の性的欲望を満足させるため、又権力や富の象徴としての階級的優越を誇示ためのものであった。一人の男性に複数の女性を配置して女性間の競争を助長させる蓄妾制は、男性の地位を実際以上に高め、反対に女性達の地位を不当に引き下げる構造をもっており、女性の価値が一人の男性の性的嗜好によって一方的に決定されるセクシズムの典型である」<sup>24</sup> とその不正を指摘している。周作人にとって、アリ・ババが富を手に入れてすぐ妾を求めるこの行為は許せることであったのであろうか。

周作人の目に映ったのはこの当時の中国と同じような、女性が男性の付属品としてしか生

き様がないという不正且つ残忍な社会制度と、妾にならざるを得ない女性の悲惨な生活であったのではないだろうか。だからこそ、彼は敢えてアリ・ババが義理の姉を妻にしたということをや曖昧にしたと考えられる。

更に、我々が目を向けるべきであるのは、彼がこの物語のタイトルを『侠女奴』にしたことである。本来この物語のタイトルは『アリ・ババと四十人の盗賊の物語』で、主人公はアリ・ババである。勤勉な樵夫アリ・ババはウィットに富み、欲の少ない人として描かれている。ところが、周作人は原作のタイトルを変え、主人公をアリ・ババ一家の女奴隷であるマルジャーナにした。そして、彼は前書きにこう書いている。

マルジャーナは一人の機敏で賢いペルシャの女奴隷で、そのご主人は盗賊に殺された。盗賊達は足跡をたどって主人の家に進入したが、計略を使って強盗を全滅させた。その英雄的な気概は、中国の女性侠客に匹敵できる。活気のない奴隷の世界に、このような珍しい者がいたとは、至急欧文から翻訳し、世の生まれ付き奴隷根性を持っている者に捧げる。<sup>25</sup>

簡潔明瞭な前書きで、周作人は機敏、聡明、忠実、勇敢な女奴隷マルジャーナを褒め称えた。マルジャーナを中国の義侠な女性に喩え、義侠心を持っている女性に対する自分自身の好感をも示したのである。また、彼は活力がなく奴隷根性が溢れているこの世の中に、まさかこのような立派な人間がいることを思いもかけなかった。そのため早速翻訳し、生まれつき奴隷根性を持っている人間に知らせようとした。

原作においてマルジャーナは奴隷であるが、アリ・ババ夫婦が幼い時に引き取って、まるで自分の子のように育てあげた娘でもある。最後に、主人一家の命を救ったマルジャーナに、主人のアリ・ババは感謝の意を込めて息子との結婚を申し出た。言い換えれば、マルジャーナはただの奴隷ではなく、アリ・ババの娘のような存在から、やがて実の家族になったのである。つまり、アリ・ババが偶然に見つけた膨大な財宝は、アッラーの祝福と家族の努力によってこの家の物となった。そして、マルジャーナもこの膨大な財宝のお陰で裕福な生活を送っていくのである。

しかし、周作人の訳文にはアリ・ババ夫婦がマルジャーナを幼い時に引き取って、まるで自分達はその子の本当の両親であるのと同じ配慮と愛情をもって育てあげた、というような表現はどこにも見当たらない。マルジャーナとアリ・ババの関係はあくまでも主人と女奴隷であるが、マルジャーナは機敏、聡明で、困難な事を首尾よく成功させる機智に富んでいるため、ご主人のアリ・ババに重要視されているだけである。そして、全財産として三頭の驢馬の持ち主に過ぎなかった樵夫のアリ・ババは、自分の運命と神の祝福のお陰で、生まれ故郷の町の中で一番金持ちで、一番尊敬を受ける人間となったが、主人の命を救い、その一家に行き届いた献身をしたマルジャーナがどうなったかは誰にも分からないという結末で、周作人は物語を終らせたのである。

以上の通り、周作人の訳文には、いくつか原文と異なるところがある。周作人が原作のあらすじの一部を変える事によって、女奴隷マルジャーナの姿が物語の中で目立つようになっ

た。マルジャーナは他人である主人アリ・ババー家を守り、救った後、財宝を享受することもなく、主人の感謝の意を受けることもなく、身を引いた。このような彼女はまさに義侠心のある女と言えよう。周作人が原作の女奴隷マルジャーナの姿をもとに、義侠心を強調したマルジャーナ像を作り上げたと言えよう。

以上に論証したように、この周作人の訳文には、郭延礼氏の言う「周作人の思想には封建礼教の影響が見られる」という事はなく、却って彼が封建礼教に反論しているように見えるのである。

### 3. 「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」——女性の自覚への呼びかけ

1904年といえば、中国はまだ清朝の光緒帝が在位し、封建社会そのものであった。「女子は才能がなければ徳である」という儒教の教えの下に、女性は男性の所有物、付属品、子を産む道具として、家に閉じ込められ、ひっそりと生きている時代である。この時、周作人が発表した文章は『侠女奴』だけではなかった。1904年5月刊の『女子世界』第5期に、周作人の「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」という文章も掲載されている。その主旨は、昔から中国の文人達はよく女性を花に喩え、彼女達の美しさを称えてきた、しかし女性の美貌を賛美する裏に、女性を男性達の付属品、玩具、生殖の道具としか認めない不平等で残忍な考えが隠されている、更に、花は確かに鮮やかで美しい、しかし一旦秋風が吹き渡ると枯れてしまい消えてしまう、それは女性に相応しくない、つまり女性を花に喩えるべきではない、というものである。また、次の一段で、彼は自由を失った中国女性の悲惨な生活を鋭く描き、女性を一人の人間として認めない、男性の玩具、生殖の道具にした封建礼教の不合理な制度をはっきりと暴き出した。

不本意ながらも着飾る生活に身を任せ、無形の牢獄に閉じこめられる …… 女は、生まれつき色気しか称えるに足りるものがないかのように、ただ男に弄ばれ、生殖の道具にされる者である<sup>26</sup>。

そして周作人は女性達の自らの自覚をも呼びかけた。

（男性は女性を遊び道具だとしている）しかし、女性自身も自分が遊びの道具だと思い込み、日々化粧と美服に心を奪われ、貴重な歳月を投げ捨てて、この不可解な状態に陥っており、男性達の喝采を博す事で、潰されていく。悲しいことだ。泣き虫か？弱虫か？どうしてここまでなったのか？……私は我々の同胞である女性達がこの悪根性から脱却することを大変望んでいる<sup>27</sup>。

自ら玩具であると認め、男性の喜びを得るため、毎日化粧に明け暮れている女性は、実は彼女自身に悪循環を続けさせ、貴重な歳月を無駄に費やしている。このように周作人は女性達に警鐘を鳴らし、彼女達の自覚を期待していた。

更に彼は、

20世紀の女性は、美しさを重視せず義侠心を重んずる、豪快であることを憂えず軟弱であることを恐れる<sup>28</sup>。

という女性の新たな生き方を提唱した。

この「美しさを重視せず義侠心を重んずる、豪快であることを憂えず軟弱であることを恐れる」という二十世紀の女性の新たな生き方を代表するのは、まさに『侠女奴』の主人公マルジャーナではないだろうか。女性への軽蔑が満ちている当時の世の中で、周作人が敢えて物語を通して言おうとしたのは、女性は男性の玩具ではなく、ただの生殖の道具でもない。女性とは本来マルジャーナのような機敏、聡明、忠実、勇敢かつ義侠心のある一人の立派な人間であるという事ではないだろうか。一方、彼が称え褒めた女性は、封建社会の典型、城を傾ける程の美しさを持っている美女でもなければ、貞節を命と引き換える貞女でもない、平凡で貧しい生活を送っている勤勉な女奴隷である。

ここで、「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」を掲載した後、周作人が『侠女奴』の翻訳に着手したことは偶然だとは考えにくいのである。封建生活に押しこまれ、また男性の歓心を得るため、毎日化粧にあけくれている女性達に新たな生き方を導くために、周作人は敢えてわかりやすい物語「侠女奴」を選んだのではないだろうか。ゆえに、小説『侠女奴』は、「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」一文の論拠であり、その展開とも言うべきであろう。これは彼の女性に対する不平等な封建制度への挑戦の第一歩であると言うより、むしろ彼は女性に対する不平等な封建制度に挑戦しようという希望を抱えて、文学界に入ったと言ったほうがよいのではないだろうか。

#### 4. 終わりに

以上論じたように、周作人は文学活動の初期から、女性の悲惨な人生と生活に同情し、封建社会・家庭制度における女性の不公平を訴えたばかりでなく、女性の自覚をも喚起しようとした。本論で取り上げた『侠女奴』、「花名を女性の代名詞にするべからざるを論ず」以外にも、『好花枝』<sup>29</sup>、『女獵人』<sup>30</sup>、「〈造人術〉のあとがき」<sup>31</sup>、「女禍傳」<sup>32</sup>、「婦女の選挙権問題」<sup>33</sup>等の小説と文章があった。彼は「〈造人術〉あとがき」の中では、天文学が発見された今日では、女性こそがこの世の新しい造物主であるとし、女性への軽蔑に反抗している。また、「女禍傳」の中では、世の中にある全ての罪悪は女性が原因とする考えの不正を訴えている。これらの作品に通じて、周作人は五四運動時期の先導者達の誰よりもいち早く、女性解放問題に力を注ぎ、様々な方面から封建制度による女性への束縛、軽蔑等を厳しく批判しながら、女性たちの自覚を喚起しようとしていた。また、彼は初期のペンネームを「碧羅」や「萍雲女士」といった女性の名前にしたのも、女性達への呼びかけと考えられるのではなからうか。1925年、周作人が自らそれまで女性問題を取り込んできた動機について、次のように述べている。「私はしょせん意気地なしの人間であるが、当時彼女達のために一度奮闘

してみようと決心した。例えその障害が人力であれ、天力であれ<sup>94</sup>と。しかし、周作人は決して「意気地なしの人間」ではなかった。その後、周作人は「人間の文学」を発表し、五四新文化運動の先頭に立った。彼は「人間の文学」を通じて、女性問題の解決をヒューマニズムの思想の下で、文学革命と結びつけ、新たな解決の道を開いていくのである。

### 〈注〉

- 1 原名は魁寿、字は星杓という。「作人」の名は江南水師学堂の時から使い始めたようである。
- 2 民主政治を鼓吹し、人権を提唱し、君主とその特権に反抗するといった民主的啓蒙運動。五四新文化運動の始まりは1915年9月陳独秀よっての『青年雜誌』（後の『新青年』雑誌）の創刊とするのが一般的。
- 3 原文名「人的文学」、1918年12月『新青年』5巻6号に掲載、署名は作人。
- 4 原文名「平民的文学」、1919年1月『每週評論』第5期に掲載、署名は仲密。
- 5 1919年3月『每週評論』第11期に掲載、署名は仲密。
- 6 原文：文学革命上、文字改革は第一歩、思想改革は第二歩、却比第一歩、更为重要。「思想革命」による。
- 7 原文名「論不宜以花為女子之代名詞」、1904年5月『女子世界』第5期、署名は吳萍雲。
- 8 丁祖蔭によって1904年に創刊された。丁祖蔭、字は之孫、芝孫、号は初我、江蘇常熟人。上海小説社の編集者。
- 9 原作は「貞操ハ道德以上ニ尊貴デアル」というタイトルのである。1915年11月雑誌『太陽』に発表され、1916年4月に刊行。『与謝野晶子全集』の第15巻に収録。
- 10 中華民國3年3月1日の『政府公報』に掲載。郭延以編著1985年(民国73年)『中華民國史事日誌』第一集台北中央研究院近代史研究所による。
- 11 中華民國3年3月1日の『政府公報』に掲載。郭延以編著1985年(民国73年)『中華民國史事日誌』第一集台北中央研究院近代史研究所による。
- 12 『新青年』5巻1号に掲載。
- 13 『新青年』5巻2号に掲載、署名は唐俟。
- 14 1921年8月10日「小孩的委屈」『晨報副镌』署名は仲密。
- 15 1923年3月14日「一角钱的离婚」『晨報副镌』署名は荊生と1923年4月25日「離婚と結婚」『晨報副镌』署名は作人による。
- 16 木原葉子1987「周作人と与謝野晶子——「貞操論」・「愛想創作」を中心に」東京女子大学『日本文学』68号
- 17 錢理群「性心理研究与自然人性的追究」程光炜編2000年1月『周作人評説80年』中国華僑出版社
- 18 『アリ・パパと四十人の盜賊の物語』の事である。この小説は1904年7月から11月まで『女子世界』に4回をわたって掲載されたが、未完。後1905年小説林社によって出版し、1906年再出版され、署名は萍雲女士。これは周作人が訳した初めての小説と見られている。なお、本論において、『侠女奴（アリ・パパと四十人の盜賊の物語）』の引用文献の出典は以下の通り：范泉等主編1991年2月（『中国近代文学大系』第11集・第28巻・翻譯文学集三）施蛰存編『翻譯文学集』上海書店

- 19 1937年山東省汶上県生まれ、1959年山東大学中文系を卒業、現在山東大学中文系教授。主要著書に『中国近代文学发展史』『中国近代文学新探』『秋瑾文学论稿』等がある。
- 20 郭延礼1998年3月『中国近代翻译文学概论』湖北教育出版社 P.455
- 21 原文：既复建议同居之便利、而陈分立之不可、因同居则非但患难可以相顾、且亦可以慰离索之感、慨星之妻、念慨已死、此间之富有、已不啻薤露、而埃梨之家、则如日方中、日进未已、且转输有所、不忧匮乏、辗转思索、觉莫妙于准此议案、因不复犹豫而即许可。
- 22 1993年 夫馬進「中国明清時代における寡婦の地位と強制再婚の風習」前川和也編「家族・世帯・家門——工業化以前の世界から」ミネルヴァ書房
- 23 佐藤正彰訳 1964年1月『千一夜物語』筑摩書房
- 24 白水紀子2001年4月『中国女性の20世紀——近現代家父長制研究』明石書店
- 25 原文：有曼绮那 *Morgiana* 者、波斯之一女奴也、机警有急智、其主人人盗穴为所杀、盗复迹至其家、曼绮那以计悉歼之、其英勇之气、颇与中国红线女侠类。沉沉奴隶海、乃有此奇物。亟从欧文移译之、以告世之奴骨天成者。（原文を入手できなかった。強調した部分は『中国近代文学大系』には掲載されていなかったが、鐘叔河編『周作人文類編』には掲載されている。）
- 26 原文：委身于脂粉生涯、闭置于无形牢狱……一似天生女子、惟色足称、止供男子之玩弄、为生殖之器具也者
- 27 原文：而我女子亦自认为玩具、日驰情于粉黛罗纨、断送其有用之光阴、造成一种不可思议之恶状、以博男子之欢笑、耗矣、哀哉！泣虫欤？弱虫欤？胡为至此？……吾甚望吾同胞姊妹、一脱此恶根性也
- 28 原文：二十世纪之女子、不尚妍丽尚豪侠、不忧粗豪忧文弱
- 29 小説、1905年の『女子世界』の第1号に掲載され、署名は萍雲女士。
- 30 小説、1905年の『女子世界』の第1号に掲載され、署名は萍雲女士。
- 31 原文名：「〈造人術〉跋語」1905年5月『女子世界』署名は萍雲。
- 32 1907年5月『女子世界』署名は病雲。
- 33 原文名：「婦女選挙権問題」1907年7月『天義報』第4期に掲載、署名は独心。
- 34 1925年2月「抱犢谷通信」『語糸』第12期に掲載、署名子棠。原文：我虽然终于是懦弱的人、当时却决心要给她们奋斗一回试一试、无论那障害是人力还是天力。

## 参考文献

### 書籍

- 佐藤正彰訳1964.1『千一夜物語』（世界文學大系73）筑摩書房
- 与謝野晶子著1972『与謝野晶子全集』文泉堂書店
- 野沢豊・田中正俊編1978.7『五・四運動』東京大学出版会
- 郭延以編著1985年『中華民国史事日誌』第1-3集台北中央研究院近代史研究所
- 張菊香・張鐵榮編著1986.11『周作人研究資料(上、下)』天津人民出版社
- 朱德發著1986.11『中国五四文学史』山東文芸出版社
- 倪墨炎著1990.7『周作人：中国的叛徒与隱士』上海文芸出版社
- 錢理群著1990.9『周作人伝』北京十月文芸出版社

- 錢理群著1991『周作人論』上海人民出版社
- 舒燕著1993.6『周作人的是非功過』人民文学出版社
- 黄修己著1995.5『中国新文学史編纂史』北京大学出版社
- 郭延礼著1998.3『中国近代翻译文学概论』湖北教育出版社
- 周作人著(鐘叔河編)1998.9『上下身：周作人文類編』(全十集)湖南文藝出版社
- 程光焯著2000.1『周作人評說80年』中国華僑出版社
- 張菊香・張鐵榮編著2000.4『周作人年譜(1885-1967)』天津人民出版社

#### 論 文

- 木原葉子1987「周作人と与謝野晶子——「貞操論」・「愛の創作」を中心に」  
『日本文学』東京女子大学68号
- 夫馬進1993年「中国明清時代における寡婦の地位と強制再婚の風習」  
前川和也編「家族・世帯・家門——工業化以前の世界から」ミネルヴァ書房